

# 呼吸不全今昔物語 —結核後遺症と現在の結核

複十字病院

診療主幹 佐々木 結花

在宅酸素療法（Home Oxygen Therapy：HOT）は1985年から保険適用となった治療で、long term oxygen therapy（LTOT：長期酸素療法）が可能となり、それ以前は、酸素吸入のみを目的とした長期入院されていた患者さんたちが在宅療養できるようになった画期的な治療法である。1985年にHOT対象となった患者さんの原疾患は、肺結核後遺症、慢性閉塞性肺疾患（COPD）の2者が多くを占め、肺線維症、肺癌等の病名で登録される方は、現在ほど高率ではなかった。

肺結核後遺症症例は、結核による肺既存構造の破壊を基盤とし、抗結核剤投与のみによって加療された症例に加え、胸郭成形術や人工気胸術、肺切除術など観血的治療を施行された症例を含み、さらに経年変化が加味された複雑な病態を一群のものとしてとらえられてきた。現在は、感受性の肺結核治療は化学療法であり、化学療法で治癒された肺結核後遺症、すなわち外科的侵襲を除いた肺結核後遺症症例の肺循環諸量と予後の関係について検討を行ったことがある<sup>1)</sup>。

対象は21例で、平均年齢 $58.4 \pm 9.4$ 歳、肺結核発症から右心カテーテルまでの期間は、5年以内が2例、6～10年0例、11～15年2例、16～20年3例、21～25年3例、26～30年3例、31年以上8例と、発病から長期に経過し経年変化を有した症例が多かった。安静臥位室内気吸入下血液ガス分析値は、 $\text{PaO}_2$   $59.3 \pm 11.4$  Torr、 $\text{PaCO}_2$   $51.9 \pm 6.3$  Torr、21例中20例が高炭酸ガス血症を伴っていた。呼吸機能では%VC  $44.1 \pm 16.3\%$ 、FEV1%  $66.6 \pm 23.0\%$ と高度の拘束性換気障害、軽度の閉塞性換気障害を認め、肺循環諸量では室内気吸入下平均肺動脈圧（PAm）は $27.1 \pm 7.1$  Torr、21例中20例でPAm 20Torr以上の肺高血圧を認め、7例がPAm 30 Torr以上の高度の肺高血圧であった。21例中HOTを施行した化療群18例の生存率は、1年生存率88.9%、3年生存率62.6%、5年生存率38.5%であった。化学療法を行って肺結核が治癒しても、呼吸機能が低下しHOTが開始されれば、約40%が3年で死亡していたことになる。現在は、非

侵襲的陽圧換気療法の開発、慢性下気道感染症への研究が進み、これほどの死亡率ではないと考えられるが、重症肺結核に懸命に立ち向かい、一息ついた患者さんに呼吸不全という後遺症が忍び寄り、命さえ奪いかねない状況は、稀ではないかもしれない。

現在でも画像上拡がりⅢや広汎空洞型肺結核（bI3）を呈する非高齢の患者さんは稀ではない。それらの患者さんは受診の遅れが長期であることが多く、結核自体の予後は良好とは言えず<sup>2)</sup>、治癒後も肺アスペルギルス症、肺非結核性抗酸菌症の発症に悩まされる場合がある。また、禁煙できず肺気腫を合併しさらに悪化のスピードが速まる可能性もある。肺結核は、発病予防、早期受診・早期診断・早期治療が重要であるということは、言うまでもない。それはただ、周囲への感染の拡大を減じ、次の世代へ感染のリンクを残さないためだけでなく、患者さん自身の生活の質を後年低下させないというもう一つの意義がある。

当院2C病棟は、慢性呼吸不全の患者さんに、「HOTステイ（ほっとステイ）」を検討中である。通常のショートステイではなく、労作・睡眠時酸素飽和度測定、適切吸入酸素量再設定、呼吸法再習得、リハビリテーションを目的としている。加えて、栄養指導、口腔ケア指導、誤嚥予防などを取り入れていく予定である。広く見渡せば、最新の潜在性肺結核感染症（LTBI）研究からこのHOTステイまでが、当院の結核対策であると言えるかもしれない。

## 文献)

- 1) 佐々木結花, 山岸文雄, 鈴木公典, 他: 化学療法にて治療された肺結核後遺症症例の肺循環諸量と予後の検討 日呼吸会誌 1998; 36: 934-938.
- 2) 佐々木結花, 山岸文雄, 八木毅典, 他: 広汎空洞型 (bI3) 肺結核症例の臨床的検討 結核 2002; 77: 443-448.